

西の湖におけるオオクチバス親魚の継続駆除による捕獲状況と食性の変化

臼杵 崇広・根本 守仁（水産課）

1. 目的

県では平成 23 年度から西の湖においてホンモロコ等在来魚の生産機能を回復させる実証試験を行ってきた。本研究ではオオクチバス（以下、バスという。）の産卵期における集中駆除の実施による効果について検討した。

2. 方法

電気ショッカーボート（以下、EFB という。）による駆除は平成 26 年 5 月 7 日から 6 月 17 日（操業日数 25 日間）まで実施され、各駆除日に得られたデータから昨年度と同様の方法により、バス親魚の当初生息尾数を推定した。また、およそ 10 日ごとに胃内容物を調査した。

3. 結果

平成 23 年度以降、4～6 月のバスの捕獲総重量と通電時間あたりの捕獲重量は年々低下した（図 1）。バス親魚の当初推定生息尾数は平成 23 年度の 2,560 尾から年々減少し、平成 26 年度には 991 尾（対平成 23 年度比 38.7%）となった（図 2）。

以上のことから、大規模な内湖である西の湖においてもバス生息量の低減手法として EFB の有効性が実証された。

平成 24 年度から平成 26 年度までの餌料重要度指数（（被食個体数比＋被食重量比）×被食頻度）の百分率を比較したところ、通期（5 月上旬～6 月上旬）では平成 24 年度にはアメリカザリガニの割合が 87.2%と高く、ホンモロコは 9.0%に過ぎなかった（図 3）。しかし、ホンモロコの割合は平成 25 年度には 66.3%、平成 26 年度には 45.5%と高くなり、これに対してアメリカザリガニの割合は平成 25 年度には 30.9%、平成 26 年度には 37.3%と低下した。このことは、西の湖でホンモロコの生息量が増加したことを表していると考えられる

が、一方で駆除の手を緩めればすぐにホンモロコが減少することをも示している。このことから、西の湖においてホンモロコ等の増殖を図るためには継続的にバスの産卵期に集中的な駆除をしていく必要がある。

今後、西の湖での実証試験と同様の手法によりバスを駆除しつつ、在来魚を放流し、増殖していく内湖などの拠点を増やしていくことが、在来魚資源の復活につながるようになる。

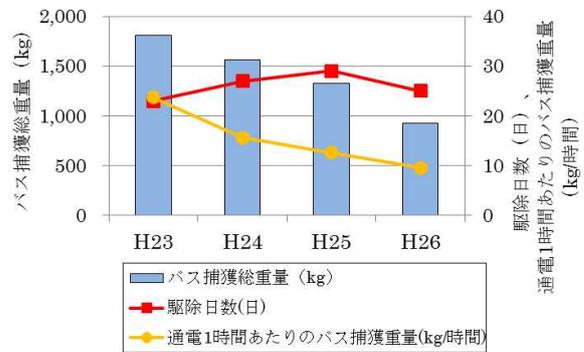


図 1 電気ショッカーボートによるオオクチバスの捕獲状況

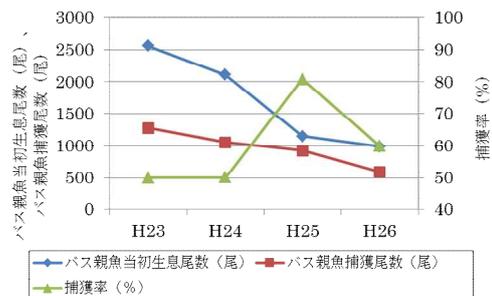


図 2 バス親魚の当初生息尾数と捕獲状況

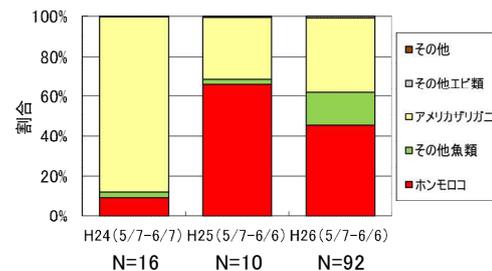


図 3 オオクチバスの餌料重要度指数の百分率の推移